

小学校社会科におけるICTを活用した授業実践

— 小学校4年生大和川のつけかえを題材にして —

学籍番号 249332

氏 名 瀧山 雄太

主指導教員 山近 博義

副指導教員 山田 周二

1. 研究の目的

第4学年社会「郷土の発展に尽くした人々」における「大和川のつけかえ」は、地域開発の歴史的経緯や先人の苦労を学ぶ重要な単元である。しかしながら、歴史的な事象、とりわけ数百年以上前の出来事やそれに伴う複雑な意見の対立というものは、児童が実感を持って理解することは容易ではない。時間的な隔たりと空間的な変容は、児童の想像力を阻害する大きな壁となっている。本校の児童は、柏原市への愛着があったとしても地域の知識がまだ不十分である。また、意見の対立についても本校児童は、男子を中心に自分本位で考える児童が多い。ICTの活用は、そのような児童の実感を伴った理解に効果的であると示されている。ただし、先行研究でも地域学習とICTの効果的な活用を目指した実践というものは、決して多くはない。また、大和川の付け替えを教材にした実践というものは、まだない。そこで本研究では、地域学習、特に、大和川の付け替えという教材とICTの効果的な活用を目指した実践を行う。

また、大和川の付け替えの歴史認識についても近年の研究によって変わってきている。しかし、現行の教科書や柏原市の副読本では、従来の歴史認識に沿って作られている。本研究では、そのような新しい歴史認識をもとに単元構想を行った。この大和川の付け替えに関する新しい歴史認識をもとにした実践にも意義が生まれると考える。

さらに、本校教員は、ICT を活用する意義は理解していてもその効果的な実践例というものがまだまだ不足しているのだと考える。そこで本研究の授業実践を通して、活用方法のモデル特に、社会科地理分野でのモデルの1つになりうるのではないかと考え、本研究の意義が生まれると考える。このような背景をもとに、本研究では、授業実践を行い、その実践に学習効果が生まれているのかを検証する。

2. 授業実践の概要

本研究の授業評価について量的アプローチと質的アプローチの両側面から検証する。量的アプローチとしては、地域への興味・関心、理解度、ICT活用の効果、デジタル地図の効果がそれぞれ授業前と授業後で高まっているかどうかを尺度形式（5段階評価）でアンケート調査を実施し、考察する。

質的アプローチとしては、学習成果物及び授業後の振り返りの考察を行う。地域への理解、

自身がどのように地域に関わっていくかなど社会科の目標とされていることが獲得できたかについて。そして、授業時に使用する思考ツールを用いた制作物によって、考えが整理され、それらを比較し、自身の意見が形成されているかを評価し、地域学習で得られる資質能力が獲得できているかを分析する。

3. 結果

本研究の実践を通して、ICT活用による効果というものを感ずることができた。今回、デジタル地図の活用や思考ツールの活用などのICTの活用は、従来の紙の地図や従来の方法に比べて、一定の効果があったのではないかと考える。データとしては、ICTを使っていない場合と単純比較できないが、アンケートからわかるように大和川の理解について効果的に働いていたといえるのではないかと考える。地域学習の目標である「社会に見られる人々の活動や地域と人々の生活との関わりについて、見学・調査したり地図や資料を活用したりする学習活動を通して、具体的に理解できるようにする」ということに関しては、振り返りから考察すると十分達成できた児童が多かったといえる。また、ICTの効果として自身も実感したものとして、児童のモチベーションの向上、板書時間の削減による授業の効率化、デジタル地図でしかできない活動の効果などが挙げられる。特に、児童のモチベーションの向上、板書時間の削減による授業の効率化は、実践前は特に意識していないものではあったが、その効果を感じることができた。

一方、ICT活用の効果の検証方法にも大きな課題があると感じた。授業内容の保障の面からICTを使った場合と使わなかった場合を同時に行い、比較することはできない。今回は、地域学習の目標及び資質・能力が獲得できているのかという指標で検証したが、他の分析方法の余地はあったと考えられる。

大和川の歴史認識に関しては、現在柏原市教育委員会の方でも副読本の改訂に動いている。そのような状態で、最新の研究をもとに構想した本研究に意義があったといえる。児童たちも単純な賛成・反対だけではないということを深く理解し、自分本位の考えではなく、ものごとを多面的に見る視点というものがついたと感じた。

4. 今後の展望

授業実践を行った本校は、スマートスクール実現モデル校に選ばれ、様々な実践に取り組んでいた。しかし、授業でのICT活用に困り感を抱えている先生方は多い印象を受けていた。全国には、ICTを日常的に活用している学校も活用できていない学校もたくさんある。ただし、授業におけるICTの活用が日常的になればなるほど、今一度その使い方に効果があるのか、子どもはきちんと学んでいるのかを見直す必要があると考える。もしICTの特性・強みを生かした活用でなかった場合、従来の紙媒体での学習の方が、子どもの学びにとっては効果がある可能性も否定できないと言える。そのため、現状の見直しとさらにICT活用を発展させていく意識は持ち続けなければならないと考える。このように、学校ごとに多様な実態があり、ICTの活用頻度にも差がある現状を踏まえながら、筆者は教職大学院を修了したあとも、配属された学校の特色を見極め、子どもにとって一番効果のあるICTの活用を提供できるよう日々研究を続けていく。